様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０１０７６

研究課題名（和文）「長い18世紀」のイギリスにおける軍事啓蒙の展開

研究課題名（英文）The Military Enlightenment in the long-eighteenth-century British Isles

研究代表者
辻本　諭（Tsujimoto, Satoshi）

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０７０６９３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、「軍事啓蒙」と総称される、18世紀ヨーロッパにおける戦争・軍隊に関するさまざまな知とそれに基づく実践が、イギリスにおいていかなる展開を見せたのかについて実証的かつ総体的な考察を行った。「軍事啓蒙」を構成する諸要素のうち、①軍事技術・理論・教育、②宗教・モラル、③医学の3つの領域に着目し、それぞれについて十分な史料調査と収集・分析を行った上で、具体的な事例に即してイギリスにおける「軍事啓蒙」の特質を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで「軍事啓蒙」研究は大陸ヨーロッパを中心に進められてきたが、本研究がイギリスの事例を加えることで、その知見をさらに深めることができた。また、本研究は「長い18世紀」におけるイギリスとヨーロッパおよび植民地との間の人的・知的交流を論じるものであり、イギリス史とヨーロッパ史、帝国史との架橋を可能にする有益な視点を提供できたと考えている。

研究成果の概要（英文）：The recent scholarship of European military history has shed a light on the wide-ranging military reforms planned and realized in the ancien-regime France and Germany (military enlightenment), while very little attention has been paid to the case in the British Isles. The aim of this study was to examine the development of this phenomenon in long-eighteenth-century Britain and Ireland. The focus was on three major elements of the ‘military enlightenment’: 1. military skills, theory and education, 2. religion and morality in the armed forces, 3. military medicine. By closely examining what reform was planned in each sphere and how it was carried into practice, the study pointed out some key features of the British military enlightenment.

研究分野：近世イギリス史

キーワード：軍事啓蒙　長い18世紀のイギリス　新しい軍事史　複合国家

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1970 年代後半以降、ヨーロッパにおける軍事史研究は、従来の戦史・制度史・技術史を中心とするものから、社会史・文化史の問題関心を取り入れた「新しい軍事史」へとシフトし、顕著な発展を遂げてきた。とくに近年では、ドイツ、フランスを中心に、18 世紀における戦争・軍隊に関するさまざまな知とそれに基づく実践の一連の蓄積・改良に注目し、それを「軍事啓蒙 military enlightenment」という言葉を用いて多面的・包括的に理解しようとする試みが始まっている。その成果として、たとえば Armstrong Starkey, *War in the age of Enlightenment, 1700-1789*, Westport, 2003 や、Christy Pichichero, *The Military Enlightenment: war and culture in the French Empire from Louis XIV to Napoleon*, Ithaca & London, 2017 が挙げられる。

一方で、同時期のイギリスについては、18 世紀後半以降に顕著となる将校による著作の出版や、軍隊内の環境の整備・改善、兵士に対するまなざしの変化など、「軍事啓蒙」に含まれるいくつもの要素が見られたことが明らかにされ、またそれらについて個別の分析がなされてきたものの（P. J. Speelman, *Henry Lloyd and the Military Enlightenment of eighteenth-century Europe*, Westport, 2002; Erica Charters, *Disease, war, and the imperial state: the welfare of the British armed forces during the Seven Years' War*, Chicago, 2014; Anthony Page, *Britain and the Seventy Years War, 1744-1815: Enlightenment, revolution and empire*, London, 2015, ch. 4)、それらを互いに結びつけて理解する試みはなされてこなかった。さらに、イギリスと大陸で類似の動向が見られたという事実をふまえ、相互の特徴や関係性について探究すること、またそれを通じてヨーロッパ規模の「軍事啓蒙」の広がり、実相を明らかにすることも、いまだ着手されていない重要課題である。本研究は、以上の点について実証的な検討を進めていくことを目指して計画された。

２．研究の目的

上記の問題関心に基づき、本研究は、18 世紀のイギリスにおける「軍事啓蒙」がいかなる内容を持ち、どのように展開したのかを明らかにしようとするものである。多くの先行研究が、「軍事啓蒙」を構成する多様な領域の中から、特定の領域に視点を限定して分析してきたのに対し、本研究では以下に示す 3 つの異なる領域を考察の対象とし、とくにそれぞれの領域と軍隊とをつなぐ境界領域とそこで活動する人々に焦点を当てた。また各領域間の関係性や大陸諸国との比較にも目を配りながら、イギリスにおける「軍事啓蒙」の全体像とその特徴を浮かび上がらせるように努めた。当時の人や出版物の移動・流通範囲を考えると、本研究の議論の空間的射程は、ブリテン諸島はもとより、ヨーロッパ、植民地にまで広がることが想定される。

３．研究の方法

本研究では、「軍事啓蒙」を構成する領域の中から、①軍事技術・理論・教育、②宗教・モラル、③医学という 3 つを考察の対象とし、それぞれにおいて軍隊との間の双方向的な相互作用を実証的に検討した。境界領域とそこで活動する人々については、①では士官学校関係者や軍人著作家、②では従軍牧師／宣教師、③では従軍医師に着目し、それぞれ具体的な人物を複数取り上げて、各人物のプロソポグラフィと関連史料の分析を行うことで、彼らの活動の内容とその特徴について考察した。研究期間として①～③それぞれに１年ずつを割り当て、研究に必要な史料調査（於イギリス）を１年目と 3 年目に行うこととした。一次史料に関しては、刊行された書籍・雑誌を ECCO (Eighteenth Century Collections Online)や NCCO (Nineteenth Century Collections Online)などのオンライン・データベースを用いて、また手稿史料については The National Archives および British Library など現地の文書館で調査を行い収集することとした。研究成果については、以下に示す学会・研究会での口頭報告および学術論文の形で発表した。

４．研究成果

上記の研究方法に基づき、各年度において関連史料の調査・収集を行った。取り上げた組織・人物と史料は以下の通りである。

【2019 年度】①に関して、イギリス最古の陸軍士官学校である Royal Military Academy, Woolrich の関連史料（*Records of the Royal Military Academy, 1741-1892*, Woolwich, 2nd ed., 1892）と、18 世紀後半に軍の内外で広く読まれた軍人著述家たち（たとえば Thomas Simes や Bennett Cuthbertson など）の著作を収集・分析した。

【2020 年度】②に関して、18 世紀後半に従軍牧師として陸軍に帯同し、その経験をもとに兵士の信仰心の問題を講じた William Agar の説教集と、国内外で陸軍の兵士たちに積極的に説教

を行い大きな影響を及ぼしたメソディスト派、とくにその創始者 John Wesley の活動を、彼の残した史料（Nehemiah Curnock, ed., *The journal of John Wesley*, 8 vols., London, 1938; Thomas Jackson, ed., *The works of John Wesley*, 14 vols., London, 1831）をもとに検討した。

【2021 年度】③については、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて、軍事医療の専門化と制度化が顕著に進んだ点に注目し、この発展を支えた複数の従軍医師（たとえば、James McGrigor や Robert Hamilton など）の著作や書簡をもとに、彼らの活動や思想について考察した。

ただし、2020 年度より世界規模で拡大した新型コロナウイルス感染症と、それに伴う行動制限により、2020 年度、2021 年度の研究活動は大きな制約を受けた。最も深刻であったのは、この間に予定していたイギリスでの史料調査が不可能となったことで、これにより②、③の研究の進捗に大幅な遅れが生じた。これに対応すべく、2021 年度末、22 年度末にそれぞれ 1 年間（合計 2 年間）の研究期間の延長を申請し、承認を受けた。

以上 5 年間の研究を通じて、①～③の領域で十分な史料を収集し、また各領域においてどのような組織・人物の手でいかなる活動が行われたのか、領域相互の結びつきも含めて分析を進めることができた。その成果の一部は、日本西洋史学会での口頭報告や、複数の書籍・雑誌論文において発表した。これらはいずれも 18 世紀イギリスにおける「軍事啓蒙」の諸側面を個別に明らかにしたものであるが、現在はそれらをもとに、イギリスとヨーロッパ諸国の「軍事啓蒙」を比較考察する取り組みを進めている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 辻本諭・田澤晴子・古田修一朗・横山翔太・板倉彩香	４．巻 71(1)
２．論文標題 岐阜から考える歴史総合(2)―「近代化」と「グローバル化」項目に関する授業提案	５．発行年 2022年
３．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）	６．最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木内翔・辻本諭	４．巻 71(2)
２．論文標題 ヨーロッパ近世史の視点から国民国家史観を問い直す―高大連携による「歴史総合」の授業実践	５．発行年 2023年
３．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）	６．最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 辻本諭	４．巻 56巻2号
２．論文標題 十九世紀初頭におけるイギリス陸軍軍人の軍隊経験とキャリア形成―特進将校ジョン・シップ（一七八五～一八三四年）を事例として	５．発行年 2020年
３．雑誌名 軍事史学	６．最初と最後の頁 49～68頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 辻本諭	４．巻 69巻2号
２．論文標題 地域の中で部隊の歴史を守り、伝える―近年のイギリスにおける連隊博物館の展示・活動から見えてくること	５．発行年 2021年
３．雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）	６．最初と最後の頁 11～21頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Satoshi Tsujimoto	4．巻 22
2．論文標題 Military history from a wider perspective: recent scholarship on the British army and society in the long eighteenth century	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6．最初と最後の頁 63-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 辻本諭	4．巻 276
2．論文標題 書評】酒井重喜著『十七世紀イギリス財政史論―「国王私財」と二つの革命』	5．発行年 2023年
3．雑誌名 西洋史学	6．最初と最後の頁 56-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 辻本諭
2．発表標題 近世史から「歴史総合」を考える
3．学会等名 東海中学・高校土曜市民講座（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 辻本諭
2．発表標題 財政軍事国家において軍隊はいかに保持されたか―イギリス陸軍の宿営をめぐる問題、1660～c.1740年
3．学会等名 第70回日本西洋史学会大会（小シンポジウム「財政軍事国家論を再考する」*オンラインでの開催）
4．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

1．著者名 岩井淳、道重一郎編著	4．発行年 2022年
2．出版社 刀水書房	5．総ページ数 376
3．書名 複合国家イギリスの地域と紐帯（執筆箇所：辻本論「複合国家と軍隊―イギリス陸軍にみる諸地域間のつながりと相互作用」第10章、278～303頁）	

1．著者名 水井万里子、大澤広晃、杉浦未樹、吉田信、伏見岳志、和田郁子、橋本真吾、八嶋由香利、イヴェト・ランジェヴァ・ラベタフィカ、ルネ・バーシュウ、ナタリー・エファーツ、ヨハン・フォリー、辻本諭、宮内洋平、岡田友和	4．発行年 2021年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 240
3．書名 史料が語る東インド航路―移動がうみだす接触領域	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関